

低年齢児の住空間理解 (その2) 模型表現にみる特徴

北浦かほる* ○萩原美智子**

(*大阪市大, **大手前女子短大)

1 はじめに 描画表現と比較するために同じ教示にもとづいた模型実験を計画した。模型部材を提供することによって表現技術の差を少なくし、低年齢児の空間理解をできる限り一般化して引き出すことを試みた。

2 **実験概要** 描画実験の被験者に描画が終わった後に模型実験を行った。模型部材として壁・窓・扉・階段の計16種類(135個)と家具類27種類(77個)を用意した。縮尺は全て1/30とし、扱いやすいように磁石で模型製作台(52cm×52cm)に自立するようにした。模型部材一式を置いて名称を説明し、「ここに○○ちゃんのお家を作ってください」と言って始めた。模型の製作過程は、使用部材を作成順に番号をつけて記録し、製作と中途と完了時に写真撮影をした。完成写真をもとに模型の平面図を描き、部材には作成順序を書き入れた。各家の平面図を参考にして分析した。

3 **考察** 模型の全使用部材数を3等分し、前・中・後期に使われた部材を分析した。殆どの子供は前半に家具や設備機器などの室内エレメントだけを配置していく作り方をしていた。家具と壁で一部屋毎に作っていく子供は小学生に一人みられただけである。壁を全く使用しなかった子供は、4・5歳児では約6割、5・6歳児では約3割、小学生では約2割あった。低年齢の子供は住空間を家具などの室内エレメントで理解していると考えられる。また部屋の位置関係を表現するようになるのは小学生以降で、幼児の7割以上は部屋相互の関係性は表現されていなかった。部屋の関係性が生じていないものにも幾つかの段階がみられた。家具類を自分の方に向けて並べていくものや家具類を散在させたものから、部屋のまとまりがあるものがみられた。